

生活の底上げが一番の地域活性化 ボトムアップの視点が必要

「地域活性化フォーラム in 道東」を釧路で開催

■ 連合北海道と釧根地域協議会が共催する「地域活性化フォーラム in 道東」が9月1日、釧路市民文化会館で開催された。地域活性化フォーラムは2015年の十勝（音更）を皮切りに上川（旭川）、道南（函館）で実施しており、今回で4回目の取り組み。土曜日の日中にもかかわらず、釧根地協の尽力で、300人以上の参加者が釧根地域を中心に全道各地から来場、「釧路の未来へ！共に生きるとは？～支え合いのリアル～」をテーマに講演とパネルディスカッションが行われた。



「働くことを軸とする安心社会の実現に向けて、互いの支え合いを軸とした地域活性化を進めたい」と述べた。相原 康伸氏

■ 主催者の連合北海道 出村会長は、他府県と比較して高い離職率となっている北海道の若者の

雇用問題や子どもの貧困、経済格差などに触れるとともに、高齢化・人口減少などが進む釧路の状況について「釧路の将来は日本の行く末。生活困窮者の自立支援事業など全国に先駆けて実施してきた釧路で、互いの連携を強め、さらに課題やその改善策が見いだせれば、さらなるモデルとして全国に発信していけると考えている」とし、本フォーラムへの期待を語った。また、多忙な公務を縫ってあいさつに駆けつけた蝦名 釧路市長は、都市部・首都圏への一極集中の問題を指摘し、「地域に住む我々が地域を盛り上げていくことが重要だ。働くことをキーワードに環境をどう整えるか、一緒に進めていきたい。こうした場をつくってくれたことに感謝したい」と釧路でのフォーラム開催に謝意を述べた。

■ 基調講演は、連合本部 相原事務局長を講師に実施。事務局長は少子高齢化・人口減少など急速に日本の社会構造が変わり、従前の




やり方では全体最適化が図られない現状について説明。自動車に例えて「アクセルワークを変えたり、ハンドルをきったり、ブレーキをかけたりすることが必要」とし、「人口や労働力減少などの要件を受け止めて、私たちが何をすべきか、そこに気づくことが大切だ」と述べた。また、IoTやAIの進展による技術革新・社会変革の渦中においてプラス・マイナス様々な見方があることに触れ、「新しい技術とどのように付き合っていくかを深く考えていかなければならない局面」とした。SDGs(エスディーゼズ 国連 持続可能な開発目標)は「普遍的な真理や人間が追い求めなければならない原則」とし、その実現には「一人ひとりの行動を変えていくことが近道」と述べた。その上で

「元気で夜遅くまで働ける人だけが社会を支えれば良いのか？様々な人による様々な支え合いが必要だと認識すれば、その中にある私たち一人ひとりの行動を変えていけるはず」と述べ、誰もが働きやすい社会環境の整備が将来あるべき社会の構築につながることを訴えた。



■パネルディスカッションは、釧路公立大学の千田講師をコーディネーターとして、厚生労働省地域福祉課生活困窮者支援室の野崎室長、北海道セーフティネット協議会の篠田代表理事、北海道新聞釧路支社の菅原支社長、釧路商工会議所企画広報課の元氏課長の4人をパネリストに実施。今回は新しい試みとして、架空に設定した「生きづらさをかかえる一人の若者＝石黒さん」（ペルソナシート）を作成。少子高齢化による労働力・担い手不足などのなかで、具体的な若者支援にスポットをあてて議論が進められた。

	5年くらい仕事に就いてない。 何をしてもし長続きしないし、人間関係が怖い。 自分に自信なんてなくて最近引きこもりがち。
石黒 友也さん 26歳 男性	不安症と診断を受ける。 父と同居しているが、不仲。 父から早く働けと言われてプレッシャーを感じる。 高卒後は建築現場や工場で働いていた。 職場の人間関係がうまくいかず、仕事が続いても数か月～1年程度。
資格なし	(支援者の見立て) 性格は寡黙。真面目に黙々と作業に取り組む。 就労意欲がある。
運転免許なし	小学校の頃は親から虐待を受けて、中学は祖母に育てられた。「家とか仕事場で安心できたことなんてない。」と言う。

■冒頭の問題提起で野崎室長は音別町で再建したフキ加工の取り組みなどの事例を挙げ、「人口減少と財政的制約など縮小局面のなかでタテ割りは機能しない。その反省に立って厚労省も地域共生社会というコンセプトを掲げた。例えば福祉と企業と農業をつなぎ合わせて“一石N鳥”で問題を解決しようということ。その実現に向けては働くことをキーワードに協働することだ」と述べた。篠田代表理事は養育困難家庭で育った若者が少数ではないこと、育った社会環境の違いによる世代間の価値観ギャップとそこに苦しむ若者の現状などを指摘。「つながりがない若者が多い。行き場のない若者を受け止め、役割と仕事をもたらしることが必要だ」としながら、運営する「暮らしの共済サービス事業『せっせ』」の取り組みを紹介した。

■「石黒さん」をめぐる議論では、菅原支社長が「仕事が続かないなど、責任ある仕事を与えられないと思うのが妥当でないか。その上で、どう支え合うか。真面目で作業に取り組む姿勢があれば合う仕事はあるかもしれない」、また、「他の人の働きによって自分の命をつないでいるのはリアル。人と人とのつながりが



見えなくっているなかで、それをわかるように伝えていくことを新聞が進めていきたい」と語った。元氏課長は「石黒さんの支援は厳しいというのが正直な考えだったが、優れた才能があるかもしれない。時間はかかるが長期的な視点で企業が考えていければ良い」と語った。



これに対し篠田代表理事は「就職したら企業にお任せというのは企業に酷だ」とし、「労働組合など企業の外で生活を支える仕組み、互いにWin-Winの関係をつくる新しい連携があれば良い」とした。

■この後も「石黒さん」の議論は続き、コミュニケーション・人間関係を構築するためアクティブシニアに活躍してもらうことや、一般就労だけでなく働くことを通じ少しずつステップアップしていけるよう「働くことを柔らかく考えいく必要がある」など多くの意見が出された。また、フロアからは「若者には教育段階から過当競争が持ち込まれている。社会がゆるやかになるべきだ」などの意見もあった。

■最後は、「市民の生活の底上げすることが一番の地域活性化。ボトムアップの視点で考えることが必要」「大切なのはそこに住む人の暮らし。地域の力を高める地道な活動が必要」との意見に会場全体の共感が得られた。パネルディスカッション終了、釧路地域協議会とコーディネーター、パネリスト全員が今後も協力して取り組みを進める「誓約書」が調印され、フォーラムは閉会した。

本フォーラムの詳細は、10月上・中旬の北海道新聞に掲載予定です。